

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 服部 諭美

論 文 題 目

Significance of Concurrent Chemoradiotherapy as Primary Treatment
in Patients with Metastatic Cervical Cancer

(遠隔転移を有する子宮頸癌患者における初回治療としての同時化学
放射線療法の意義)

論文審査担当者 名古屋大学教授

主 査 委員 小寺 泰弘
名古屋大学教授

委員 今釜 史郎
名古屋大学教授

委員 高橋 義行
名古屋大学教授

指導教授 梶山 広明

論文審査の結果の要旨

早期・局所進行子宮頸癌においては原発腫瘍径が予後因子となることが報告されているが、遠隔転移を有する患者における原発腫瘍径の意義は不明である。今回、名古屋大学で治療を行った遠隔転移を有する患者を後方視的に解析し、原発腫瘍径が 6.9cm 以下の患者の予後は、6.9cm を超える患者と比較して有意に良好であり、遠隔転移を有する患者においても原発腫瘍径が予後因子となることを明らかにした。特に同時化学放射線療法 (CCRT) により原発腫瘍の完全奏功が得られた患者の予後が良好であり、遠隔転移を有する患者に対しても、局所治療である CCRT を積極的に行うことが予後延長に寄与する可能性が示唆された。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 遠隔転移を有する子宮頸癌患者の治療においては、標準治療として化学療法が選択される。CCRT は化学療法と比較して骨髄抑制が強く、また放射線膀胱炎・腸炎等の放射線治療特有の有害事象が発生する可能性がある。今回の検討でも、患者の全身状態や臓器障害を理由に、CCRT 以外の初回治療 (化学療法、放射線単独治療、手術) を選択した患者も存在する。本研究は 13 年間の長期間に及ぶ後方視的な研究であるため、有害事象の正確な評価ができていないが、CCRT を選択した患者における治療関連死はなく、ほとんどの患者で治療が完遂できていた。治療開始前に患者の全身状態や臓器障害を適切に評価し、CCRT を完遂できる客観的な指標の確立が望まれる。
2. 子宮頸癌の画像診断においては MRI T2 強調画像が多用されており、今回、全症例において MRI T2 強調画像水平断面、矢状断面、冠状断面における腫瘍長径を測定した結果、矢状断面の長径が最も長い傾向があった。三次元に腫瘍体積を評価する方法も存在するが、測定が簡便であり臨床応用しやすいことと、原発腫瘍の大きさを最も反映していると考えられたことから、矢状断面の腫瘍長径を原発腫瘍径として採用した。
3. 遠隔転移を有する子宮頸癌においては、大きな原発腫瘍に起因する出血や疼痛が患者の Quality of life (QOL) や Performance status (PS) を低下させるため、より高い局所制御効果の期待できる CCRT を行うことで、患者の QOL や PS が改善し、転移病巣に対する治療選択肢が広がって、予後延長に寄与したのではないかと考える。

本研究は、遠隔転移を有する子宮頸癌患者に対する最適な治療法を確立する上で、重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士 (医学) の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	服部 諭美
試験担当者	主査 小寺 泰弘		副査 ₁ 今釜 史郎	
	副査 ₂ 高橋 義行		指導教授 梶山 広明	
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 同時化学放射線療法の安全性・有害事象について2. 原発腫瘍径の評価方法の妥当性について3. 遠隔転移を有する子宮頸癌患者に局所治療を行うことの意義について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、産婦人科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				